

立香とモードレッドの改造が始まってから二週間が経過していた。
二人を奴隷娼婦にするための悲惨な改造はまだ終わっていない。
肉体を常に発情状態にさせることから始まった改造は、新たな段階へと進んでいた。
それは彼女たちの誇り高い精神をも奴隷送付とするための脳改造だった。

「おおおっ、やめろおおッ！ これ以上っ、オレを犯すのをやめっ、はひいいいっ！！」

アンダーエデンの医務室にモードレッドの嬌声が響き渡った。

「ひいいいッ、チンポがあっ、やめおほおおッ！ チンポ入れるなあッ！」

宙づりにされたモードレッドの身体がビクンビクンと震え、身体をくねくねと振じらせる。

「あひいいいッ！ ひっ、はっ、ひくううっ、あっあッ！ ああああ、あああああッッ！！」

乳房は小さいなりにパンパンに張り詰め、乳首を堅く、ビンビンにそそり立たせている。
対魔忍コスチュームは食い込み、陰唇をくっつきを浮かばせ、漏れ出る愛液をダラダラと太もものに垂らし、膣口は不自然に拡がり、ヒクヒクと震えている。

「ああああッ、チンポがまたあッ、オレの中にいッ、おおおおッッ！ 頭おかしくなるッ！！ チンポやめろおッ！」

腰をクイクイと小刻みに揺らしながら、モードレッドは否定の声を大きくする。
モードレッドは犯されていると言っているが、犯しているのは生身の男ではない。
二人は魔界の医療技術が生み出したおぞましい洗脳装置によって、イメージの中で犯され続けているのだ。

「ひああああッ、やめッ、ああああああああああああッッ！！」

モードレッド、そして立香の頭にはドーム型のヘルメットがうっぼりと被せられている。
ウネウネと蠢く生体部品と機械部分からなるヘルメットは、大量のコアが伸びて、その先は天井へ伸び、洗脳装置本体へと繋がっている。
さらに二人の耳には触手に似た生体部品が張り付き、耳から怪しげな薬液を注入している。
口は触手装置によって無理やり広げられ、大きく開けた口には、半透明の触手パイプがペニスのように挿入され、白濁した薬液を胃に直接送っている。
今、立香とモードレッドの脳には卑猥な肉欲体験が濁流のように次々と流れ込んでいた。
現実ではないと脳では分かっている、弄繰り回されている脳は二人に現実と同様の快楽を肉体に与えている。
イメージの中ではモードレッドは誰とも知らぬ男たちに代わる代わる犯されていた。
血管が浮き上がるほどにギンギンの肉棒が、モードレッドの処女マンコを貫き、力強く膣を擦り、白濁色の液体を容赦なく吐き出していく。

「ああああああッッ！！ 熱いいッ、オレの中で射精すんなああッッ！！ あああああんんッ」

脈打つ肉棒が何度も精液を膣内で吐き出し、あふれ出る精液をお構いなしに、何度もモードレッドの膣を突き上げていく。

「モっ、モードレッドっ！ しっかりっ！ これは……イメージなんだよっ！」

立香はモードレッドに訴えかける。
立香のイメージはまだまだ序の口で、今は大陰唇を舐められ、小陰唇を嚙りながら吸われている最中だった。

「分かってるッ！ 分かってるんだよっ、マスター！！ でもっ、ああッ！ チンポが

っ、中でっ、どくどくって脈打ってっ、ああああああッ！！　また出されるううッ！　あ
っいいいいいいッ！！」

分かっていたも逃れられない。
肉棒のイメージはどうしようもないほど現実的なもので、モードレッドの身体を責め立て
る。

「モードレッドッ！　しっかり気をもっおとおおおおおッ！！」

再びモードレッドに訴えかけようとした立香の身体は大きく跳ねて、苦悶に歪ませていた
顔が一気にメスの顔に変わった。
イメージの中では三本のペニスが立香のマンコの中にねじ込まれていた。

「はひいッ、こ、こんああッ、三本なんてッ！　おちんちんがっ三本もおおッ！！」

洗脳装置に釣り下げられている立香の身体がガクガクと痙攣する。
現実では絶対にありえない、ペニスの三本突きに立香はメスの悲鳴を上げる。

「あへえええッ、おちんちんっ、中にっ、めくれちゃうッ、おまんこめくれちゃうッ！
！　おかしくなるううううッ！！」

圧倒的な快感が立香の全身を駆け巡る。
膣口をヒクヒクとさせながらも。愛液はドバドバとあふれ出し、ぶちゅりぶちゅりとコス
チュームから漏れ出す。

「三本がっ、気持ちいいッ！　痛くないッ、気持ちいいよおおッ！　嘘おちんちんが気持
ちいいッ！　おっ、おとおおッ、我慢できッイグううううッ！！」
「ああああダメだッ、イクッ、偽チンポでイカされるッ！　あっあっあっあっ、イクイ
クイクイクううううッ！！」
「狂うううッ！　三本おちんちん凄すぎてっ、お願いっ、抜いてッ、これ以上ッ私を壊
さないでええッ！！」
「ひおおおおッ！　熱い精液いいッ、おとおおッ！！　ちち、うええッ、ごめ
んなさいッ、オレッ、イクッ、レイプされてイクううううッ！！」

二人は何度も絶頂を迎える。
立香は三本の肉棒による、破壊的な快楽により、モードレッドは男達にレイプされる自分
を情けなく思い、ちちうえという人物に謝りながら、並んで潮を噴き上げていく。
ビジャビジャとコスチュームから潮が漏れ出し、床に垂れ流していく。
奴隷娼婦のアクメが容赦なく脳の細胞一つ一つに刻み込まれていく。

「おちんちんがああッ、気持ちよすぎてっ、イクッううッ！！　こんなに気持ちいいけど
おッ、嘘なのにッ、おまんこ気持ちいいいいいいッ！！」
「はあっああああッ、熱いのがいいッ、マンコが悦んでッ、あっ、おっ、イクッううッ！
チンポ凄すぎッ！」
「おちんちんッ、おちんちんッ！　あはああッ……こんなの、んほおおおおッ！　お
かしくなるううううううッ！！」
「これ以上はっ、狂うッ！　チンポに狂わされるッ！　オレが壊れるうう……ああああ
ああッ！！　ちちうええ……オレはああああああああッ！！　イグううううううッ！！」

二人はパクパクと開閉を繰り返す膣口からトロトロと淫液をたら流す。
おぞましい脳改造はまだ始まったばかりである。
二人の理性はオーガズムを迎えるたびに擦り切れ、変えられようとしている。
連続アクメをキメる二人だが、特にモードレッドはちちうえとうわ言のように繰り返し唱
えながら、絶頂を迎えていた。

「そこおッ！　お尻ッ！　そこっ、お尻ッ！　おちんちんがッ、んほおおおおおッ
ッ！！　ゴリゴリいいッ、おちんちんゴリゴリってえ！　中をおおおおおおッ

ッ！！」

「乳首いい、吸うなあッ！ マンコを突きながらそれッ、止めろおッ！ いひいいいん
んんッ！！ 頭痺れるううッ、乳首吸われてイクッ！！ チンポでイクううううううう
ッッ！！」

新たな刺激に、二人の理性はますます快楽に浸食される。
脳髄は卑猥なイメージと疑似体験で埋め尽くされていく。

「お尻の中ああッ、おちんちんで捏ねくりまわされてるううッ！！ 太いいいい！ お尻
が勝手にきもちよくなりゆうううううううう！！」
「ああああああッ、クリトリスううううッ、こしゆるなあああああッ！！ 乳首とマン
コとクリトリスが同時にいいいいいい、やへろおおおおおッッ、おおおおイグイグイグ
うううううう！！」

呂律の回らない口調で二人は淫らな声を叫ぶ。
無様なメス顔をさらし、確実に二人は奴隷娼婦の階段を登っている。

「あっへえええええええええええええええッッ！！！」
「へっああああああああああああああああッッ！！！」

二人が同時に大きく身体を跳ねさせると、大きな嬌声を上げて、アクメした。
ブシャブシャと潮を噴き、いやらしく脈動する蜜壺からはドロドロと蕩けた蜜を垂れ流
す。

「へひいいッ、またあ……イクッ、イクッ……イクのがとまらないいいいいいい」
「頭が蕩けるううう……オレは……一体どうなるんだ……マンコ……いいいい」

痙攣を繰り返す膣はその震えすらも快楽に変え、二人は無限の絶頂を果たす。
白目をむきつつある瞳からは涙が溢れ、二人の頬を濡らす。

「ああああああ……これが肉体改造う……ダヴィンチ、ちゃん……これえ、んひいつ、耐
え切れなかもお……」
「くるう……これえ……マンコダメになる……ああああ……ちちうえにい……顔向けでき
ないい……」

腰をクイクイ動かし、身体を震わせながら二人は淫靡なダンスを披露する。
二人の洗脳はまだ始まったばかり……。

一週間経過した。
二人はその間改造を休むことなく続けられ、正常の精神は擦り切れ、その精神は奴隷娼婦
のものへと変わり果てつつあった。
強制絶頂の回数は何万、いや何十万回もこなし、愛液と汗が蒸発し、立香とモードレッド
から醸し出されるフェロモンと混ざり合い、医務室にはメスの匂いがムンムンと漂ってい
る。

「いっひひいいいいいいいいいいいいいいッッ！！」
「おっおひょおおおおおおおおおおおッッ！！」

二人の嬌声が今日も医務室に木霊する。

「あ”へえああああッッ！！ あ”—————ッッ！！！！ あ

”~~~~~ツッ！！！！”

「んお”お”おおえへあ”あ”あああツッ！！ お”~~~~~ツッ！！ ひぐう
うううううツッ！！！！」

「お、お、おまんこおおおおおおおツッ！！！！」

「チンポすきいいいいいいいいいいいいツッ！！！！」

恥ずかしげもなく、二人は大きな声で下品な言葉を叫んでいる。

覚悟を決め、強い瞳を持っていた立香も誇り高き騎士であるモードレッドも、どちらもその瞳からは何も感じられず、ただただ快楽を享受する人形になっていた。

「オシッコ漏れりゆうつううう、もらひれりゆうううううツ、あへあへえあああツ、きも
ひよおおおおおツ」

「潮吹きいいいいッ、ブシュブシュ出すのいいいいいい、マンコからあ、汁出すのすき
いいいいッ」

「もーどれっどお、わらひい……ずっとイってるのおお……おまんこがあ……おまんこが
あ……ずっとイクううう」

「ましゅたあ、オレもお……ずっとイってるうう……チンポでイかされてえ……マンコが
気持ちいいんだあ……」

無様なアクメ顔をキめている二人の表情はここ数日間変わっていない。

まるでそれ以外の表情を忘れたかのように固まっていた。

しっかりと閉じていた両足はカエルのようにガニ股に広げ、しやらしい汁を壊れた蛇口み
たいに、延々と垂れ流していた。

汁には愛液以外に潮と尿を含み、黄色に濁った水溜りが床に広がっていた。

半開きの口からは涎がドロドロと溢れ、悦楽の叫びを上げ続けいる。

「あへっつあへっつ！ えひいいい、あっ、あああああっ、いひいいんツ！！」

「へはあ、へひえはあああツ！ ひゃひひいいいいいッ、おへあああああ！！」

「またあああッ、イクッ！ イクッ！ んあああああああああツッ、おまんこイクううう
うう！！ お尻もイクううううう！！ すごいアクメくるッ！！ くるくるくるくるうう
ううううううツッ！！！！」

「ひひゃあああああッ、マンコがイクうううツ！！ またあッ、んいいいいいいいッ、イク
うううううツ！！ ちくびもイクうううッ！！ へにやあああああああツッ！！」

完全に白目を剥き、狂ったように叫ぶ続ける立香とモードレッド。

今の二人の状態は強靱な精神がもたらした最後の正気の時間だった。

「もうう、おちんちんやめてええ……好きになるうう……おちんちん好きになっちゃう

う、映像とめてえ……んほおっ、おおおおおおツッ！！！！」

「あああああ……チンポがあ……精液があ……好きになるう……ああああ、チンポお、チ
ンポおおおッ、んぎいいいいいいいいツッ！！！！」

ぶしゃあああああああツッ、と二人は今までとは比べ物にならないほどの潮を吹く。

まるで正常の精神を吐き出すかのように。

「おちんちんすきいい……大好きなのおお……おちんちん……メス豚はあ、おちんちんが
すきいいッ……ちがっ……わらひい、メス豚ああ」

「チンポお……メス豚、チンポすきいいッ……オレは……チンポが好きなんだああッ……
チンポチンポお……あひいいッ、イクうううう」

「奴隷娼婦にならずに……おちんちんご奉仕しなくちゃあ……ああああ……お客様の
のお……おちんちん……ご奉仕い……すきいいい……女の幸せなのおお……奴隷娼婦う
う……」

「お客様に……仕えるのがあ……オレのお使命いい……チンポご奉仕すきいい……へひい
いッ、どれいひようふにい……メス豚にい……なるうう……ちちうええ……奴隷娼婦のオ
レをほめてええ……」

立香とモードレッドは強制絶頂を繰り返しながらも、ブツブツと奴隷娼婦としての心得を
呟き続ける。

強靱な精神は快樂に屈服し、二人の頭には奴隸娼婦になれた悦びしかなかった。

「おちんちんんん……本物おちんちんほしい……おちんちんをお、おまんこで気持ちよくするうう……それが任務う……おまんこでえ、おまんこでえ」

「んへああっ……マンコでえ……チンポ奉仕い……それがオレたちのお……幸せえええ……チンポすきいい……だいすきなんらああああ」

股間から噴水のようにあふれ出る淫靡な液体は床の水溜りを大きくし、時間経過で蒸発する水溜りはムワリと甘酸っぱい匂いを放つ。

瞳は濁りきり、何も映していない。

立香の対魔忍の心とモードレッドの騎士としての心は崩れ去っている。

二人は身も心も奴隸娼婦になり、その身体を男のために使い、男を悦ばせることだけを考えるメス豚へとなり果てたのだった。